

# 「仁和寺にある法師」のために

—— 文学と教材とのあわい、もしくは「授業改善」の基底と創造 ——

金 井 利 浩

〈キーワード〉国語教育と国語国文学研究      文学と教材      『徒然草』第52段  
授業改善      〈何が書かれていたのか〉から〈どう書かれているのか〉へ

## はじめに

梶川信行が古典の教科書や教師用指導書、殊に高等学校「国語総合」のそれらに内包された問題、すなわち、教科書や教師用指導書における『万葉集』に係る記述や取扱いが、文学研究の現状とどれほどの隔たりを有してしまっているかについて、その実態・実情を憂慮しつつ審らかにしてから疾うに12年余が過ぎた。この間、その「隔たり」は、ひとり『万葉集』にとどまらない、また高等学校に限らない問題として各方面・各誌上で取りあげられ、<sup>(1)</sup>「中等学校（中学校・高等学校）における国語教育と、国語学・国文学の研究とは、本来不即不離の関係にあったはずである。ところが、現在両者は不幸にして乖離しがちである」との言明<sup>(2)</sup>までも見てきたわけだけれども、残念ながら、その「現在」は、教科書や教師用指導書<sup>(3)</sup>の一部において、こんにちに延伸されたままであると言わざるを得ないようである。

たとえば、掲題の「仁和寺にある法師」、すなわち『徒然草』は第52段についてである。高等学校では、それこそ「国語総合」において、

- ・「何事かありけむ。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」の言葉からうかがえる、この法師の性格について考えてみよう。

(下線は引用者。以下同じ。桐原書店・国総022、024・2003)<sup>(4)</sup>

といった「手引き」が、また中学校では、

- ・この法師の人柄をどう思うか。 (学校図書・国語807・1997)
- ・「仁和寺にある法師」は、どんな人物だと考えられるだろうか。法師の言動を手がかりにして、話し合ってみよう。 (東京書籍・国語821・2012)
- ・法師はどんな人物だったのだろう。表現に注意して読み、根拠を明らかにして話し合ってみよう。 (光村図書・国語831・2016)

といった「手引き」や「課題」が、一部のではあれ「教科書」において発出しつづけられてきた。

同章段に描かれた、というよりも、正確を期すならば引き合いに出されたと言ふべき「法

師」について、その「性格」や「人柄」、もしくは「人物」は、明らかにし得る性質のものであったらどうか。あるいはまた、そもそも同章段を読むこととは、それらを明かすことなのだろうか。

上に引いた「手引き」や「課題」は、「法師」をめぐる〈何が書かれていたのか〉を先ずは問う発想に立脚し、そこから、描かれた出来事を「法師」の「勘違い」、それを描いた文章の本体を「笑い話」、末尾の一文を「教訓」とそれぞれ規定し、そのうえで、「出来事」＝「勘違い」の一つひとつの因由を「法師」の「性格」等々に求め（させ）ようとする、まさにステレオタイプの思考に根ざしたものであると言わざるを得ない。尤も、そうしたステレオタイプが国文学「研究」や「研究者」によっても齎されてきた側面の存することは否定し得ないのだけれども、このあと縷々検証していくが、〈どう書かれているのか〉を問う発想に立つかぎり、「法師」の「性格」も「人柄」も「人間」も、およそ抽出し得るような文章ではないことを、かつての国文学研究や研究者が明らかにしてきたのもまた事実である。

翻って、上記の意味においてかなりの難問を、いや、永遠に解の得られない奇問を、高校生はおろか中学生にまで「考える」よう「手引き」する「教科書」のありよう、ひいてはその「教科書」を用いて授業が行なわれている現実を、わたしたちはどう受けとめたらよいのであろうか。

もしも、とある学校のとある教室で、教員の或る種の誘導よろしく、くだんの「法師」を吊し上げるかのように、生徒から、やれ「頑固」だの、「プライドが高すぎる」だの、「孤独」だのといった、よく言えば〈活発な意見〉、わるく言えば〈悪乗りのこきおろし〉が百出し、それをもって「主体的・対話的な授業」が成立しているものと認識しているとしたら、それこそが、笑い話にもならない、その教員の大きい勘違いというべきであろう。

教材は、研究し尽くされ初めて教材になる。とある教材に係るステレオタイプの扱い方による型どおりの授業は、授業ではない。

かくて、『徒然草』第52段を例に、〈どう書かれているのか〉を問う観点から導かれる読みの如何、そこから生徒に向けて投げかけ得る問いや指示し得る課題の限界を明らめ、併せて授業改善への提言に向かおうとするものである。

## 1 第1段落をめぐる

### 1-1 読みの変遷と達成

改めて引いてみよう、『徒然草』第52段は、次のように始発する<sup>(5)</sup>。

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心憂く覚えて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩<sup>かち</sup>より詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。

読まれるとおり、仁和寺の老法師が、あるとき思い立って、かねて念願であった石清水八幡宮の参拝に出向いたものの、八幡宮の宮寺である極楽寺や同じく摂社である高良大明神などを拝し、これでよしとばかりに得心して帰ってきてしまった、という。

学習者がこの読み取りに向かうにあたり、授業者側の今日的な指導観の抱えこみの料として、まずは中野（2018）に触れておきたい。「仁和寺」「石清水」という歴史的事項についての説明はそれとしても、「法師」が仁和寺から石清水まで「徒歩」で「詣で」たことに係って両者の距離への注目を促したいとする同論が提示してみせた、ICT 機器を利用した古典学習の可能性は、今日的な有用性を担保し得ようことに鑑みて、まずは広く知らしめられ、学校現場において現に試みられてよいだろう。

すなわち、タブレット端末を用いての、仁和寺・石清水それぞれの地点やその周辺の地勢の確認・理解、両者の道のりの把握、あるいは距離の計測とその遠さの体感、さらには石清水八幡宮の、たとえば上空からの写真映像を視認してのビジュアルイメージの把握、加うるに石清水八幡宮の公式サイトにアクセスさせ、読解に必要な情報を抽出するといったワークからの作品解釈への還元等々は、中野が言明するとおり、文部科学省のいわゆる「情報活用の実践力」の鍛錬に直結するであろうことはもとより、何よりも、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての端緒を、紛う方なく拓くことになるであろう。

さて、今日的な観点からの提言は然るにても、注釈史を顧みるにつけ、この第1段落の読解における要諦も陥穽も、ひとえに、「ただ一人、徒歩より」に存した、と言わねばなるまい。

いちはやく齋藤（1952：88-89）は、これを次のように訳し、説いていた。

〔口訳〕 同伴者なし独りで、（河舟にも乗らず）陸路

〔語釈〕 かちより一陸路に因つて。河船ならば桂川を利用すると神社の西麓の橋本町に着ける。

次いで、この語釈を「注釈」の項にそのまま引用した安良岡（1967）は、「解説」の項で「<sup>ママ</sup>齋藤氏の注釈に感謝の意を表したい」とも述べて、

「徒歩より」の句が、河船によらない徒歩による陸行の意であろうことは、この時代の交通状態から推して確かであると思う。そうすると、ただひとり、道づれも作らず、ひたむきに四里ばかりの道を歩き続けた老僧の姿もやや具体的に浮かんでくる（…）。淀川を下る船中ならば、同じ八幡宮参拝者も同船していたことであろう。（…）したがって、「ただひとり」「徒歩より」の二つの句は、この僧の失敗を導き出す重要な素因をなしていたことになると思う。

と説いた。この説述は爾後かなりの影響を与えることになり、古橋（1974）はこれを「貴重である」と賞揚し、富倉・貴志（1975）はこれを明らかに踏まえたと思しき表現を以て、「徒歩より」について、「当時京都からの参詣は多く舟便を用いた」と注したのであったが、さ

らに私たちは、上記の説述とまさに符節を合わせたかのような、

(…) 同坊の法師たちと連れ立ってではなく、ただ一人で徒歩で行ったので、石清水八幡宮の麓に着くまで、教えてもらう機会を逸した。もし同行者がいれば、あるいは徒歩ではなく川船で行けば、乗り合わせた者たちの世間話で気づいたであろうに。この法師は、仁和寺の中でも、また日頃の行動においても、一人の世界に閉じ籠もっていたのではないだろうか。

との「評」をもって「法師」を批撃する島内（2010）に出会うことになるのであった。

さて、話が少しのあいだ本筋から逸れることになるけれども、この島内（2010）の刊行が、いわゆる指導書や現場の教員に、少なからぬ影響を及ぼしたと見立てたのが原（2023）である。

参観した多くの授業で、等し並みに「仁和寺の法師は、なぜ勘違いをしたのだろうか」との課題が発せられる現実違和を感じた原は、その課題が教師用指導書に載る例題の一つであると知り、さらに同指導書には、それに対して、「ただ一人で徒歩により参詣したことであり、『二人であれば気づく』」との答えが用意されていたこと、その上、「語句・表現」の解説欄に、「徒歩より」について、

(…) 道心堅固さを示すため、あえて苦しい手段を選んだと考えられる。なお、当時、石清水詣では、舟で行くのが普通だったといわれ、そのことから、この「徒歩より」を「陸行により」の意とする説もある。舟で行ってれば、石清水詣でをよく知る案内役にも出会えたはずである。「ただ一人」「徒歩より」詣でたところから、この法師の勘違いは始まったともいえよう。

と説明されていたことに違和を募らせ、果たして、参観した現場を担っていた授業者のほとんどが島内（2010）の読者であった事実を把握することとなったのであった。

要するに、「あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩<sup>かち</sup>より詣でけり。」という本文の、「ただ一人」も、「徒歩より」も、ともに法師の失敗の要因を指し示しているのだとする、安良岡（1967）に発して島内（2010）に至るまで陸続と行なわれてきた解釈・理解が、指導書にまで浸透・定着し、それに沿った授業が多くの教室の現場で便々と続けられてきたのであろう実態を、いわば一つの警鐘として、原（2023）は私たちに知らしめたのである。

閑話休題。一方で原が大々的に引照したのもまさに道理というべく、私たちには稲田（2008）こそが、島内（2010）に先立って既知のものであった。

そう、「問題としたいのは、『ある時思ひ立ちて、ただひとり、徒歩よりまうでけり』の『徒歩よりまうづ』に込めた、兼好の表現意図とその効果に関してである。その直前の『ただひとり』のもつ意味は、末尾の『先達はあらきほしき事なり』と緊密に噛み合せて、失敗の要因となったものとして、容易に汲みとれる。しかるに、わざわざ『徒歩（かち）』で参詣したと記したのは、どんな意図があつてのことか」と問うた稲田は、「徒歩より」という表現

を諸書にわたって渉猟し、その意味・意図するところを吟味・検討した上で、一旦、

(…)「徒歩より詣づ」という行為は、敢えて自己に辛苦を課すことによって、信仰の深さを示すと同時に、神仏からの大きな御利益を期待することを目的としたものであるということだった。

との小結論を得、改めて『徒然草』に戻って、

まず、老法師が「徒歩より」参詣したのは、仁和寺から八幡宮までは、「いったん鳥羽あたりまで出て乗船するよりは、時間的にも、距離的にも手っとりばよい」からとか、仁和寺から八幡宮へは西国街道を南下する方が遙かに早いので、「地理的状况から生じた偶然のことであろう」といった理解が妥当でないことは、もはや贅言を要しないであろう。仁和寺の法師は、そういった地理的な状況による配慮からではなく、乗物を利用せず、敢えて「徒歩より」参詣する行為を選んだのである。それはとりもなおさず、自分に辛苦を課すことによって、信仰の深さを示し、神の御利益を期待したためである。と説き、次いで再び、「兼好は『ただひとり、徒歩よりまうでけり』を、どのような表現意図、表現効果をねらって記したのであろうか。『ただひとり』で参詣したことが、失敗の原因になっていることは明瞭だが、『徒歩よりまうでけり』も、それと同次元のものとして理解すべきものであろうか」と問い、果たして、安良岡（1967）のかの説述を「いささか穿ちすぎではなからうか」として斥け、さらに、「その意味で、兼好が『徒歩より』と特記した理由を、当時京都から八幡宮への参詣が、多く船便を用いたためといった性格の注を付すことも誤解を招くことになりかねない」と論難した上で、

兼好は、老法師が、わざわざ「徒歩より」参詣した行為の目的を十分に諒解して、ここに特記している。その際、「徒歩」でなく、船便を利用すれば、こんな失敗はなかったろうにといった表現意図は、ここに込めているとは思われない。石清水八幡宮の参詣には、船や馬や輿などの乗物を利用せず、自己に辛苦を課し、御利益を期待して、敢えて「徒歩より」参詣する手段を選んだことを明示したのであり、特に船便にこだわっていないし、ましてその行為が失敗を招く重要な素因であったなどと表現してはいない。失敗の重要な素因は、あくまで「ただひとり」にあり、「徒歩より」をそれと同次元のものと理解するのは妥当ではない。

と結論づけていたのである。

ただし、念のため言い添えておけば、稲田論そのものにも言明されているとおり、この、わざわざの徒歩による参詣の事由を、敢えて辛く苦しい手段を選んだためとする指摘は、『徒然草寿命院抄』をもって嚆矢とする。すなわち「カチヨリ」に注して「徒歩也乗物ナラスノ辛苦ゾ参詣也」と記していたのであり、また、いわゆる新注のなかで、初めてこれを適切に引いて施注に活かしたのが、三木（1982）であった。その注は、次のとおりである。

○徒歩より（…）徒歩での参詣であることを特記したのは、当時の都人の石清水詣では多く船便が用いられたためである。『全注釈』は、記録類を引き、鳥羽・賀茂川尻から乗船した人々が男山のふもとの橋本、またはその対岸の山崎で上陸、山上をめざしたことを指摘するが、この法師の場合は、起点が西の郊外の仁和寺なので、陸路の方が「時間的にも、距離的にも手っとりばやい」ためとする。しかし、現実には二経路間にあまり差はなく、船による省力を考えれば、法師が、道心のあかしとすべく、あえて負担の多い方法を選ったと考える方がよからう。その点、『寿命院抄』の「乗物ならず、辛苦して参詣する也」という旧説が肯定される。

いかがであろうか。要は、徒然草〈注釈〉ないし〈研究〉史上には、島内（2010）の前に、これだけの、厳として燦たる成果が挙げられていたということなのである。にもかかわらず、島内がつゆほどもそれに触れることなく、根拠もまるで薄弱な「評」をものし、そればかりか、「日頃の行動においても、一人の世界に閉じ籠もっていたのではないだろうか」との妄言を弄したことは、つくづく残念でならない。併せて、如上の三木（1982）や稲田（2008）等の成果が現場の先生方の視界・手許にまで弘められた気配・形跡が毫も感じられないばかりか、誤解を怖れずに率直に言えば、多くの先生方が指導書に倚りかかることに終始したり、或る一つの解釈と並置・併記されるべき別の解釈の存在やその可能性への想像力を欠いたりしつづけてきたのではないか、と思われるにつけ、遺憾に堪えないのである。

## 1-2 読みの未達とその補完

さて、しかし、翻って、稲田が<sup>こた</sup>固執わり、問いつづけた「兼好の表現意図、表現効果」は、ほんとうに存在したのであるか、というよりも、『徒然草』第52段は、そも、作者の表現意図や表現効果を探り得るような文体を有していたのであろうか。

あるいは、先の安良岡（1967）に対して異を唱えた桑原（1977）にも、『「ただひとり徒歩」で出かけたというのは、この地理的状況から生じた偶然のことであろう。しかしそのことによって、参詣ということをひたすら目ざして、八幡宮の特徴とか地勢とかに目もくれない老僧の一途さが表現されることになった。』（下線は引用者）との言表が用いられていたことが確認できるのだが、その「表現され」たものとは、作者によってあらかじめ企図されたそれとしてその効果を問い得るような性質のものだったのであろうか。

ここで、益田（1959）を引き合いに出したい。こんにち知る者は少なくなっているであろうけれど、夙に知られた明断である。

（…）世間話である仁和寺の法師の話は、「年よるまで石清水を拝まざりければ、……ただひとり、徒歩よりまうでけり。」「かばかりと心得てかへりにけり。」（…）のように、過去の伝聞をあらわす助動詞「けり」で語り進められ（…）その後の話を積み重ね

ていくのも、伝承説話、とくに世間話の一つの特色である。「かばかりと心得てかへりに〈けるが〉」というふうに、前の部分が後の話の前提条件として従属的に語られるのではなく、それが、一つの事件として、一応独立して「かへりにけり。」と語り終えられ、その上に、次の話がやってくるのである。これは学習者である生徒には当面必要のないことであるが、教師が知っておくことは無益ではない。（下線は、引用者）

きょうび、どれほどの教師が、こうした叙述や文体の要諦を知悉・理解し、さらにはまたそれ以上に、それを生徒たちに説くことの要を理會し得ているだろうか。伝えつづけられてよいこと、伝えつづけられねばならなかったことが、いつの間にか切断され、こんにちに至っていることを思い知らされるのである。その意味でこの明察は、先見の明をも伴っていたと言うべく、発表から優に半世紀以上を経たこんにちの「教師」に対しても、いな、こんにちの「教師」に対してこそ有用・必要であった、と言ってよいだろうが、今はひとまず措くでしょう。

確認を急ぎたいのは、益田が明らめた叙述・文体のありようを前提とするとき、「ただ一人、徒歩より」という、見るからに並立を構えるこの表現の、前者「ただひとり」は「法師」の失敗の素因、後者「徒歩より」は「法師」が自己に辛苦を課し御利益を期待して選んだ手段であることを明示するための表現、と、切り分けてする理解はほんとうに成り立つものだったのであろうか、というその一点である。

つねに過去の伝聞の助動詞「けり」をもって語り進められる、益田のいわゆる「一つの事件」とは、作者が聞き知った事実としての出来事、の謂いであろう。だとすれば、その「出来事」内の主語は、言うまでもなく、その「出来事」を引き起こす主体（主人公）ないしそれに伴った言動をとる相手、と見るのが道理ではなかったか。

もう一度、本文に立ち返ってみたい。第52段は、どう書かれていたであろうか。

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心憂く覚えて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩より詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。

「…法師、…ければ、…て、…て、…けり。…て、…て…にけり。」という骨格と構文とを、しかと見つめたい。

これを、「…法師が、…たとかで、…して、…して、…たという。（彼は）…して、…して…てしまったということだ。」と解釈して誤りがないとすれば、二つの「けり」（「…たという」／「…てしまったという」）に承けとめられていくその中身は、書き手が聞き知った「法師」の行動ばかり、と読むのが道理というものではなかったか。よって、そこに作者の「表現意図」や「表現効果」を読み取ろうとすることは、むしろ如上の構文や文体を読み誤ることになるのではあるまいか、と考えるのである。

果たして、「ただ一人」も、「徒歩より」も、作者の表現としてではなく、他ならぬ「法師」の、いわば自らが選び取った行為の付帯事項、より具体的に言えば、その際の心理の反映として直叙されたものと読まれるべきであった。その意味で言えば、安良岡(1967)や島内(2010)を批判しつつ稲田(2008)を賞揚した原(2023)が、にもかかわらず稲田とは袂を分かち恰好で「ただ一人」に拘泥<sup>こだ</sup>わりつづけたこと、故なしとしないばかりか、むしろそのこだわりを大いに多としたいのである。

原は、実は稲田も「徒歩より詣でけり」の把握をめぐる考察を進めるなかでは、「老法師の気持と筆者兼好の表現意図とは、一応別次元のものとして切り離しておく方が穏当である」として留意を喚起していたその「老法師の気持」を、他ならぬ「ただ一人」——稲田がついに向けることはなかった——からも探ろうとする視点を欠落せしめることなく誠実に対峙し、次のとおりそれを別抉し、結論づけている。

実をいうと、この問題(引用者注:老僧はなぜ「ひとり」で行ったのか、という疑問)に答えるのはかなり難しいと言わざるをえません。老僧の心の内面を探ることになるからです。そこで、この問題を考えるヒントとなる二つの資料を次に挙げておきます。『一遍上人語録』(大橋俊雄編岩波文庫昭和六〇(一九八五)年)の中の和歌と『歎異抄』(鈴木大榮校注岩波文庫)の結びの部分です。

#### 『一遍上人語録』「偈頌和歌」

市屋道場御化益の頃、詠じ給ひける、

おのづから相あふ時もわかれてもひとりはいつもひとりなりけり

(以下、引用略)

#### 『歎異抄』の結びの部分

聖人(親鸞)のつねの仰せには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐候ひしことを、いままた案ずるに、(以下、略)

この二つの中に込められているのは、信仰の中にある信じる者の覚悟というか、自己を見つめ迷いぬいて行き着いた到達点であることは、間違いがありません。仁和寺の老僧も、「年よるまで石清水を拜まざりければ、心憂く覺えて」とあるように「心憂く覺え」るだけの心的葛藤があったのです。その葛藤は結局は自分自身で向かい合って何とか結末を着けなければ、立命安心できないものとなります。だから、阿弥陀如来と向かい合おうとし、その垂迹した八幡大菩薩を拜もうとしたのではないのでしょうか。だからこそ、「ある時、思ひ立ちて、たゞ一人徒歩より詣でけり。」となったと読むことはできないでしょうか。

(下線は、引用者)

肯われるべきであろう。

顧みれば、私たちは本文を順を追って丹念に読み取ればよかっただけなのだ、という原点に帰着するだけであるようにも思えてくる。

——仁和寺に住する、一人の法師がいた。その法師は、年をとるまで石清水八幡宮を参詣したことがなかったという。そのために「心憂く」思われてならず、ある日ある時、よしとばかりに決意を固めて——と読み進めれば、長年にわたって石清水詣でを果たしてこなかった法師が、我が身と心とを責め立てずにはいられない、要するに自責の念にかられていたであろうことが、よく見えてくるだろう。それを「心憂し」の語が表している。よって、教室の現場では、この語をこそ先ずはしっかりと押さえる必要がある／あったはずだ。その指示・指導や実践は、どこまでおこなわれている／きたであろうか。あやしい。いや、現場の先生方も気の毒ではある。公刊され来たった注釈書のどれほど多くが、「残念に思い」などとさりとて現代語に置き換えてしまってきたことか。知られるとおり、「心憂し」は、自身に対しては、何らかの憂さを抱える自分を情けなく感じることをいう語である。ここでの「法師」についていえば、いつまでも参詣を果たさずにきた自分が自分でいやでいやでたまらなくなった、そんなニュアンスを、しっかりと確認する必要がある／あったはずである。

さて、法師はそんな自分から脱け出すべく、どうしたのか。本文に戻ろう。

——ある日ある時、ついに決意を固めて、自分ひとりで、かつ自分の脚と足とで参詣に向かったという。

もはや分明であろう。いつまでも参詣を果たしてこなかった自身を厭い、そんな己れの非を埋め合わせようとする法師には、参詣とはいわば自浄の途に就くことであった。してみれば、他者に同道を恃むはずもなければ頼めるはずもなく、また、船であろうが馬であろうが、はたまた牛車であろうが、それらは端<sup>はな</sup>から慮外のものであり、自身の脚と足とを以て向かうことを自らに課す以外に選択肢はなかったのである。

さて、着いて、どうなったか。本文の展開は、こうである。

宮寺である極楽寺と摂社である高良大明神などを拝んで、これで宿願は叶ったと得心して帰ってしまったということだ——。

これをもって、とかく「法師の勘違い」ということが言われてきた。しかし、読まれるとおり、「法師」は未だ一方的な思い込みのなかにあるだけである。ところが、これが「勘違い」と評されたことで、その因由を「法師」の性格に求めたり、さらにはその性格をあげつらったりするような、それこそ誤解に基づく授業計画が「指導書」上にも示されきた。だが、少なくとも作者兼好は、「勘違い」を言い立てたり、それを批評・批判したりなど、一切してはいない。今さら言うにも及ぶまい。書かれているのは、「法師」の、どこまでも「自ら」に執しつづけた情動と行動のみである——この素朴な事実を、改めて玩味しておきたい。

## 2 第2段落をめぐって

### 2-1 本文のありようとその読みの要諦

第2段落は、次のとおりである。

さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。

この段落についても、夙に齋藤（1952）が、「(…)法師の態度を特に精寫せず、『——山までは見ず』という言葉でくくつている技法に敬服される」と、あるいは益田（1959）が、「忘れてならないことは、こうした話の中で、兼好は一度も自分の意見をさしはさまず、主観的な表現・描写も試みていないことである」と、本文のありようの核芯をとらえ、的確に摘要していたことを、先ずは想起しておきたい。

いかにも、作者は淡々たる客観描写をおこなっているだけなのだ。

——そして、くだんの法師は同僚にむかって、「何年も気になっていたことを、ようやく果たしました。聞いていたそれ以上にそれはそれは尊くおいででした。それにしても、参詣に訪れていた人の誰もが山の上へ向かったのは、何があったのだろうか、気にはなったけれど、神へ参拝するそれだけが自分の宿願だと思って、山までは見ませんでした。」とそんなふうに語ったそうだ。

いかがであろうか。行文の枠組は、「(法師は) …て、『…』とぞ…ける。」と、極めて簡潔であり、そこに配された動詞は「あふ」と「言ふ」のみ、あとは『…』のなかに、作者の伝え聞いた「法師」の発話が、いわゆる直接話法の文体によって再現された恰好で置かれただけである。

さて、ならば「法師」は、何を、どのように語ったのか。鍵は、二つの「こそ」にあるだろう。それこそ中学校用教科書には「係り結び」としてコーナーを設け、「『ぞ』や『こそ』の語によって事象や行為が強調され、文末（結びの部分）が変化するという特徴をもつ。」といった説明とともに実例として「尊くこそおはしけれ。」を掲げているものもあるのだが、<sup>(6)</sup>肝心なのは、その一文にはなぜ「こそ」が用いられたのだろうか、あるいは、「こそ」が用いられていることで、その一文は、どのような意味や意義を帯びていると考えられるのだろうか、と問うてみることであろう。

先ずは「聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。」について言えば、看取ないし感取した、聞きしにも勝る莊嚴さを言挙げすることで、長年にわたって参拝を庶幾しつづけてきた対象としての石清水八幡宮を、敬虔に讃えた一文であらう。

次いで「神へ参るこそ本意なれ」は、そのまま、己れの「本願・目的」は「神への参拝」ただそれのみだとの思いに改めて任じたことをはっきりと表しているのであって、第1段落

から読み取り得た、自身の自浄をも宗とする「法師」の参拝への発意を起点にすれば、この脇見ひとつ許さない一途さは、或る意味で当然であり、また自然でもある心の流路として読み得るし、また読み取るべきだったのでもあるまいか。

なお、その意味では、この「神へ参るこそ本意なれ」を挟む、「ゆかしかりしかど…山までは見ず」から感取される自己抑制の発動も、この「法師」本位に考えれば当然のなりゆきであって、彼の「無知」や自身の「誇示」<sup>(8)</sup>などといった観点を持ち込む得るような文脈ではないものとするのだが、いかがであろうか。

私たちは、或る意味で『徒然草』第52段の文体を無視して恣意的に「法師」像をつくりあげ、さらにまた勝手気儘にその「法師」を独り歩きさせてきたのではないか。憂慮されてならない。

## 2-2 読みの未達とその補完

たとえば益田（1959）は、

「そも、…（引用者、略す）…、山までは見ず。」というまじめくさった話しぶり、とりわけ、「山までは見ず」という思慮ありげな口ぶり。（…）

と腐した。

安良岡（1967）は、

（…）自分の迂闊さを気づかずに、「まことに尊くこそおはしけれ」と感歎し、「神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」と得意げに言い切っている所に、その滑稽なひとりよがりぶりが露呈されている。

と説いた。

さらに桑原（1977）は、

（…）帰ってきてから同輩にいうことばが、笑いをそそる。

年頃思ひつること…（引用者、略す）…尊くこそおはしけれ。

参詣し得たと思う安ど感・得意の気持ちから、自分の見た八幡宮が想像以上に立派だったと感嘆しているのである。

そも参りたる人ごとに…（引用者、略す）…山までは見ず。

ここに至って、同輩にも、この僧がまちがいを犯したことがわかるのだが、この僧のことばには、自分ばかりが真の信仰心があって参詣しているのであって、他人は物見遊山ののどかな気持ちで山上に行っていた、と、やや得意になっているところが感じられて、読者の笑いをそそるのである。

と評し、三木（1982）は、

（…）ここには前段（引用者注：第51段）にない人物描写があり、それが絶妙である。遠路を徒歩で（おそらく日帰りの旅であろう）おもむき、要事以外をかえりみようとしな

いひたむきさ。石清水の社殿が山上にあることさえ知らない無知。「ゆかし」と思いながら、だれに尋ねようもしない内気さ。自分のまじめさを得意そうに仲間に語るときの中の抜けた姿。

と評言を列ねた。

あるいは稲田（2008）は、

老法師の石清水八幡宮参詣が、単に、その建造物の壮観さやその鎮座する場所を物見遊山するためではなく、深い信仰心によるものであったことは、（…引用者、略す…）かたへの人に対しても「年比思ひつること、果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ」と、対象を建造物の壮観さの視点からではなく、尊厳さからとらえていることから明瞭である。また、「人ごとに山へ登りし」様子を見て、「ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」と、観光気分でなかったことを誇示しているし、筆者兼好も微妙な筆使いで、そのように人物造型している。（波線、原文）

と分析し、中野（2018）は、

（…）「何事かありけん、…（引用者、略す）…、山までは見ず」はどうか。この一文が「何事かありけん、ゆかしかりし」で終わっていれば、特に違和感を覚えることもないだろう。素晴らしい神社参詣を果たした折に、多くの人が特定の方向に向かっているのを目の当たりにすれば、そこに何かあるのだろう、それは何なのだろうと感じる、自分もそちらをのぞいてみたいと思うのは自然なことに違いない。

しかしこの法師は、そうしなかった。そしてその理由を、「神へ参るこそ本意なれと思ひて山までは見ず」と言い放ったのである。これは以下の二点において、看過できない内容となっていると思われる。一つは、山へ登る人たちを物見と決めつけていること、もう一つは、対照的に信仰心に篤い自身を誇示する物言いになっていることである。

まず法師は、自分とは異なり山を登って行く人たちが、信仰心のため（八幡宮を拝むため）にそうしているという可能性を、全く想定していない。あの人たちとは違い、自分は信仰心に篤い法師なので、山へ登るようなことはしないのだ、という理屈である。山へ登る人たちと自分との差異を、信仰心の多寡に求めていることは明らかだ。そして法師は、そのような認識を実にてらいもなく「かたへの人」に伝えている。よくいえば信仰の世界にのみ生きることを、ただひたすら尊いものと捉える宗教的な純真さが、悪くいえば自らの信仰心を誇り、承認されたいという欲求が、そこに見え隠れしてはいまいか。

と論じた。

いったい、「山までは見ず」の口吻は、「思慮ありげ」であったのか、「得意げ」であったのか。八幡宮への感嘆は、純なものであったのか、「安ど」を得たがゆえのものであったのか。

か。はたまた「ゆかし」との思いを抱きながらその先へと一步を踏み出さなかったのは、「内気さ」のせいであったのか、それとも、山上へと向かう、信仰心の寡ない人びとと自分は違うのだという「理屈」によったものなのか――。

諸兄姉ないし先生方は、これらをどのように受けとめ、いかに評するであろうか。

畢竟、第52段の「法師」は、読む者の主観ないし先入観によって評価・批判されつづけてきたのだと言うほかはないだろう。しかも上に引照したとおり、注釈（研究）史上での把握・定位の見定めがたさや浮動的なありようが露わになるにつけ、それがそのまま、事柄の本質を捉えきれてはいなかったのだという事実を浮き彫りにしているように思われてならないのである。

卑見によれば、「法師」は、大真面目に、と言ってよくなければ純粋に、いわゆる「自覚」を語っただけである。「自覚」は、「純粹経験」と言い換えてもよいだろう。「純粹経験」とは、経験に対する一つの意識の流れであり、一切の区切りを持つことのない認識の流れの謂いである。第52段の「法師」の場合でいえば、「心憂し」の思いを抱いて以降、「参拝」完遂に至るまでの一連なりの意識と認識とを、端的に言えば「事実」を語ったのである。

と陳べたところで、たいへんな落とし物をしていたことに気づかされたような思いとともに想起されるのは古橋（1974）である。

古橋は、疾うに、かく擱んでいた。

（…）この法師が年寄るまで石清水を参拝しなかったことを「心憂く」覚えていたことも注意すべきである。その内心の鬱積を払わんために、「ある時思ひ立ちて」「ただひとり、徒歩より」出発する独断的行為をもたらし、自分の失敗に気付かずに、傍輩に得意になって話すひとりよがりな行為を生んだのである。ここには、ひたすらに自らの内心の問題にのみ注意を集中し、客観的に自己ならびに外部の問題を把握することのできない、この種の人間の類型が示されている。

すべてに首肯し得るわけではないけれども、第52段について、「心憂く」の自覚に発して己れにのみ執しつづける「法師」の輪郭それ一つを描いてみせた論評が、他にあったであろうか。

こうした成果を継起発展せしめることなく或る種の誤読をつづけ、「研究」「注釈」の名のもとに個々人が独断専行的に「法師」をあげつらってきた、そうした国文学「研究」の実態の厳存に気づかされるに際しては、指導書の不備・偏向や現場の先生方の想像力の欠如や不勉強ばかりを難じることの理不尽を、自省・自戒とともに思うこともまた頻りである。

### 3 第3段落をめぐって

第1・2段落を承けての第3段落は、よく知られた次の一文であり、そのまま章段の掉尾を成す。

少しのことに、先達はあらまほしきことなり。

さて、この一文、残念ながら大いに誤って受けとめられてきたのではあるまいか。そしてそのことが、第52段という章段全体の読解をも誤らせたり曇らせたりしてしまう陥穽となっていたのではないだろうか。

たとえば、稲田(2008)が「徒歩より」について明敏犀利なる把握・理會を披瀝する一方で、「ただひとり」については特段の検証も経ずして、『「ただひとり」]のもつ意味は、末尾の『先達はあらまほしき事なり』と緊密に噛み合って、失敗の要因となったものとして、容易に汲みとれる」とか、『「ただひとり」]で参詣したことが、失敗の原因になっていることは明瞭だ』と、あたかも自明であるかのように処断して憚らなかったところに逆に或る種の窮屈さや強引さが感じられたこと、あるいは原(2023)が「少しの事」の対義語を「大事」と措定し、「大事」すなわち「出家」を「とりあえずクリアしている」老僧にとってはすべてが「少しの事」、その「少しの事」に圍繞された日常に不安があったればこそ為した参詣が失敗に終わったのは「極楽往生への導きを丁寧に行うことのできる先達が誰もいな」かったからで、つまりところ第52段は、そのような「仁和寺の現実についての鋭い批判がこめられているということになる」と、あらぬ方向へと結論を導いてしまったこと、それらはいずれも如上の「陥穽」に嵌まっていたことに因るものと思量されてならないのである。

「陥穽」は、実は、稲田の用いた言説のなかにそのまま現れていた。すなわち、第1段落ないし第2段落に用いられた表現や論理は、第3段落の一文と「緊密に噛み合って」いるという理解が先入主となって、それが直接的・直進的に章段読解の大前提として据えられてしまっていたのである。

端的に言おう。『徒然草』の章段掉尾の教訓的一文は、そこに至るまでの内容に〈ついて〉のものではなく、それを〈ふまえて〉のものであった。決して「法師」に向けられたのではなく、「人間」一般へと放たれたのである。

近時、そのことを的確・明晰に説いてくれたのが、川平(2020)である。川平は先ず、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』といった説話集が、説経師が「喩え話として引くためのネタ帳であった」こと、また、「一見、特に教訓臭のしない滑稽話があったとしても、それは本格的な教えを説くための導入部(マクラ)のネタであったり、またそれ自体がいつでも教訓へと転化できるネタであったりした」ことを押さえた上で、

(…) 仁和寺関連三話などには、そういう兼好の説経師としての顔が、ときどき見え隠れする。(…) 兼好が説経師になりきって話している(書いている)、そういう印象があるのである。

と述べておいて、『徒然草』第51段から第54段までの解釈のあり方について次のように説いた。

(…) 第五一段から五四段のあいだには、それぞれの話を最後にきりっと引き締める、このような主題が存在していると考えるのが、近世期の「読み」であった。彼らは、表面的な滑稽は言わずもがなのこととしてさておき、その基底に存在する教訓的な主題をしっかりと評価しようとしたわけである。

(…) 近代に入ると「文学」の評価軸は大きく揺れ動き、教訓的要素は前代的なものとして退けられるようになった。さらに近代の『徒然草』テキストにおいては、抜粋本も多くなり、なおさら教訓的な主題が見えにくくなってしまっている。より表層的な部分、つまり滑稽ばかりに評価の比重が移ってしまうのも無理はない。

しかしこれらの章段において、内海の『評釈』のように、教訓は軽い付け足し程度であり、滑稽こそがその主題だと言いきってしまうのは、どうであろうか。事実はその逆で、そこには教訓的な主題が錨のように下ろされており、その上に滑稽的な表現が繰り広げられていると見るべきではないだろうか。これが、前節で述べた説話的構造というものである。

私はこのように、「鼎」の段を含む第五一段から五四段までの解釈については、近世期の注釈者たちの「読み」のセンスに学ぶべきところがあると考えている。ただし念のために言うが、私はこれらの段を教訓として読むべきであり、滑稽として読むべきではないと言いたいのではない。説話的構造においては、教訓と滑稽はいわば「体」と「用」の関係であり、矛盾するものではない。両者は表裏一体なのである。

だから、あまりに教訓を毛嫌いし、それに「辟易」してしまっていては、『徒然草』の本質を見誤りかねない。教訓と滑稽が見事に融和した理想的な姿がここにはあるのだ。

「教訓」を言うために「滑稽」は語られ（書かれ）、「滑稽」を内包する〈特殊〉があつてこそ〈一般〉へと押し啓かれる「教訓」は位座を得、屹立し得る——『徒然草』の少なくとも第51段からの四章段が、表現構造体として、そういうありようを体しているということであれば、改めて、第52段の語られ方（書かれ方）は見つめ直されて然るべきだろう。

なぜ、第1・第2段落には、「法師」の情動と行動とに係る「事実」しか書かれなかったのか。第2段落に登場した「かたへの人」の反応・応答は、なぜ欠片も記されなかったのか。あるいは、およそ第1・第2段落の表現や文脈の〈中〉にのみ「滑稽」を見出し、また指摘してきた従前の研究や注釈における本文との向き合い方は、それで十全であったのだろうか。

私見によれば、第1・第2段落に「法師」の情動と行動とに係る「事実」しか書かれなかったのも、第2段落に「かたへの人」の反応・応答が記されなかったのも、すべては、書かれることのなかった、第1・第2段落の表現や文脈の〈後〉を俟つためであった。

すなわち、読者は第2段落までを読むや、「かたへの人」の反応としての言葉を、またそ

の言葉を聞いての「法師」の表情を、心を、間違いなく想像するであろう——「その『山』こそが男山八幡、つまりは『石清水』なのだよ」といった類いの言葉が「かたへの人」から放たれる場面を、そしてその言葉によって「真相」を知悉せしめられる瞬間の「法師」の色を失った表情やこわばる顔、やり場のない心や揺動してやまない内面を——そのとき・そこにおいてではなかったか、読者が、その「表情」を想い描いて「滑稽」を、その「心」に思いを寄せてほろ苦さや哀感を帯びた「滑稽」を覚えるのは——。

果たして真の「滑稽」にふれたところで、読者は教訓を受けとめることになる。兼好は、読者に向けて、そのようにして教訓のメッセージを投げたのである。

——どんな些細なことについても、案内役は持ちたいものである。

ちなみに、これを前節で述べた「純粹経験」ということに即していえば、自分の認識下の或る地点に到達することを願う人間は、その地点に向かおうとする意識をひとたび抱えこむや、往々にしてその意識を区切ってみようとはせず、ましてや、その意識を抱えた自己の行動を客観視してみようなどとはつゆほども思おうとはしない、よって、その意識の抱え方や行動のありように過ちや誤りがあっても気づくことはなく、ついに至った結果が客観的にみれば失敗である場合でも、個によっては失敗などとは認識し得ないこともあって、一連の意識の流れと行動とを全き正なるものと認識しつづけて已まない、したがって、くだんの、認識下の或る地点への到達を真に願い現に達成したいのであれば、それがどれほど私にささやかなものであっても、一連の意識の流れに切れ目を入れてくれる他者、己れの行動を客観視し得る眼を持たせてくれる他者を、必ず恃むべきである、と変換し得よう。

惟れば、人が、おのが意識を一元的に抱え、貫流するその流れを一つにしてしまうとき、その人にはいかに周囲の存在が見えず、またその声が聞こえなくなることか。或る意識下におのが言動を自律的に自縄しようとする念の切にして大なればなるほど、まこと、そのときにこそ、一貫して已まぬその意識にみずから楔を入れ、あえて他者を請じ入れる自在を得たいものだ、とするメッセージは、蓋しそのとおりでもあろう。

なお、『徒然草諺解』に「此段モ前ヲ承テ我意ニ任スレハ必ス過チアル事ヲ述フ」との評言が見える。まさに簡にして要を得た寸言と評してよいだろう。翻って、川平（2020）の登場を俟たずとも、当章段の「教訓」の真髓を、前章段のそれとの連関も含めて捉えた注釈が疾うにおこなわれていたことを知るにつけ、それをこんにちに繋いで来なかった注釈史<sup>(9)</sup>には憾みが遺るといえば遺ろう。

#### 4 過往の授業実践から向後の授業改善へ

「はじめに」でも少しく述べたとおり、多くの教室での『徒然草』第52段は、あえて些かの揶揄をこめて評すれば、長きにわたって、「法師」の失敗の「原因」探しとその「原因」

をもたらした「法師」の「性格」診断、それに加えて「かたへの人」に語った際の「法師」の「心理」当てのためのテキストというに甘んじてきたと言えよう。

もちろん、教科書そのものが、以下に掲げるとおりのありようを示しつつけてきたのであってみれば、それも無理からぬことではあったのかもしれない。

- ・これは一法師の失敗談であるが、その失敗の原因は本文中にどのように描かれているか、指摘してみよう。(設問：角川書店・国総 002・1987)
- ・本文は、一法師の失敗談であるが、その原因として、どのような事柄が考えられるか、挙げてみよう。(【学習】：右文書院・国 I 516・1994)
- ・(…)法師が「かたへの人」に話した言葉の中から、この法師の心理がよく表れている表現を抜き出して、その心理を説明せよ。([学習と研究]：尚学図書・国 I 522・1994)
- ・作者の感想が述べられている部分を指摘し、それがどういう事実から出てきたのか、本文に即して説明してみよう。(【学習の手引き】：大修館書店・古 I 557, 558・1999)
- ・法師の失敗の原因としてどのような事柄が考えられるか、指摘してみよう。(【学習】：右文書院・古 I 563・1999)
- ・本文は、一法師の失敗談であるが、その原因として、どのような事柄が考えられるか、挙げてみよう。(●学習：右文書院・国総 014・2003)
- ・最後の一文を引き出すために効果的に使われている言葉を、第一段落から抜き出してみよう。(学習：第一学習社・国総 021・2003)
- ・「何事かありけむ。……山までは見ず。」の言葉からうかがえる、この法師の性格について考えてみよう。(学習の手引き：桐原書店・国総 022, 024・2003)
- ・「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」とあるが、それは仁和寺の法師のどのような行動に対する語か。(学習の手引き：教育出版・国総 343・2017)
- ・最後の一文を引き出すために効果的に使われている言葉を第一段落から抜き出してみよう。(学習：第一学習社・国総 361, 362・2017)
- (以上、高等学校教科書。以下、中学校教科書)
- ・「仁和寺にある法師」は、どこをどんな気持ちで拝み、また、どんなことを考えながら帰ったのか。
- ・この法師の人柄をどう思うか。(学習の手引き：学校図書・国語 807・1997)
- ・(…)法師のどのような行動に対して「先達はあらまほしきことなり。」といっているのか。(【学習の手引き】：教育出版・国語 809・1997)
- ・「ゆかしかりしかど、……山までは見ず。」と言ったという法師の話を、作者はどう考えているか。(光村図書・国語 810・1997)
- ・法師が「山までは見ず。」と言ったときの気持ちはどのようなものか、まとめよう。

- ・「少しのことにも先達はあらまほしきことなり。」は、どのような事実を受けて言ったことばか、まとめよう。(学習のために：三省堂・国語 803・2002)
- ・「法師」が「山までは見ず。」と言ったときの気持ちはどのようなものか、まとめよう。
- ・「少しのことにも先達はあらまほしきことなり。」は、どのような事実を受けて言ったことばか、まとめよう。(学びの道しるべ：三省堂・国語 808・2006)
- ・(…)法師のどのような行動に対して、「先達はあらまほしきことなり。」といっているのか、考えてみよう。(みちしるべ～学習の手引き～：教育出版・国語 809・2006)
- ・仁和寺の法師のかん違いがわかる部分を原文から抜き出そう。また、そのことを作者はどのように考えているだろう。作者の考えがわかる部分を原文から抜き出そう。(学習：光村図書・国語 810・2006)
- ・石清水八幡宮にお参りしたときの、「仁和寺にある法師」の気持ちを考えてみよう。
- ・筆者は、「仁和寺にある法師」のどのような行動に対して、「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」と考えたのか、話し合ってみよう。(課題 読み取る：東京書籍・国語 821・2012)
- ・「仁和寺にある法師」は、どんな人物であると考えられるだろうか。法師の言動を手がかりにして、話し合ってみよう。(課題 考えを深める：東京書籍・国語 821・2012)
- ・(…)法師のどのような行動に対して、筆者は「先達はあらまほしきことなり。」と言っているのか、考えよう。(考えよう：教育出版・国語 825・2012)
- ・仁和寺の法師は、どのような勘違いをしてしまったのだろうか。それがわかる部分を、原文から抜き出したり、145 ページの図を使ったりして説明してみよう。
- ・作者は、仁和寺の法師の勘違いをどのようにみているだろう。作者の考えがわかる部分を原文から抜き出そう。(学習 読みを深めよう：光村図書・国語 826・2012)
- ・「徒然草」の筆者は、「仁和寺にある法師」のどのような行動に対して「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」と考えたのだろうか。(てびき 読み取る：東京書籍・国語 827・2016)
- ・筆者は、どのようなできごとを受けて、「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」と言っているのか、考えよう。(学びの道しるべ：三省堂・国語 829・2016)
- ・(…)法師のどのような行動に対して、筆者は「先達はあらまほしきことなり。」と言っているのか。(みちしるべ 深めよう：教育出版・国語 830・2016)
- ・法師は、どんな勘違いをしてしまったのだろうか。原文から抜き出したり、143 ページの図を使ったりして説明しよう。
- ・作者は、法師の勘違いをどのように捉えているだろう。作者の考えがわかる部分を原文から抜き出そう。(学習 読みを深めよう：光村図書・国語 831・2016)

・法師はどんな人物だったのだろう。表現に注意して読み、根拠を明らかにして話し合ってみよう。

(〔学習〕自分の考えをもとう：光村図書・国語 831・2016)

それにしても、かく列記・通覧してみるにつけ、「手引き」や「課題」の名のもとに、いったいどれほどの無理難題を発出しつづけてきたのか、との思いを私には禁じ得ないのだが、諸賢、いかがであろうか。

もはや、あまり多くを繰り返すつもりもないが、たとえば、高等学校教科書で、第一学習者・国総が2003年度版から2017年度版に至るまで発出しつづけた課題は、そのように指示し得るに足る〈読み〉の根拠を持ち合わせ得ていたのであろうか。答えには、「ただ一人」と「徒歩より」とが想定されていたのであろうけれど、それは、効果を上げるべく作者があらかじめ伏線よろしく仕込んであったというようなものであろうか。

あるいは、2003年度版桐原書店・国総 022 ならびに 024 の指示には、いったい誰が応じられるのであろうか。高慢？ プライドが高い？ そう断定し得る根拠はあるのだろうか。

片や中学校教科書においても、謎とともに疑問が残る。たとえば、東京書籍が2012年度版国語 821 で投げかけ、せっかく賢察をもって（と、評価しておこう）2016年度版国語 827 では封じたのに、あたかも、ならばこちらで復活といわんばかりに同年の光村図書・国語 831 が発したその指示には、どう対応すればよいのであろうか。

あるいは、教育出版が1997年度版から一貫して発出しつづけている問い・指示は、ほんらい直接しないはずの両者を、それでもなんでも接合して応じよ、というのであろうか。

ことほどさように、実直に向き合おうとすればするほど難難を極める、いや、大袈裟でも戯言でもなく、根拠や答えを探しあぐねて迷妄の闇に嵌まりかねない、そんな難題が、教科書には掲出されつづけてきたのである。

ところが、あろうことか、いとも易くこれが解けてしまう、すなわち正解ならざる解が正解になってしまう、それが現場の実態なのだ。それほどまでに、安良岡（1967）や三木（1982）あたりに完全に依拠するかたちでものされた教師用指導書による導きや島内（2010）などの示した理解が、現場を席卷してきたのである。

幸か不幸か、第52段は、高等学校教科書からは消えつつある。かろうじて収載を続ける第一学習社は新学習指導要領下で新規に編集・発行した『言語文化』において、しかし、

・「山までは見ず」という言葉には、法師のどのような考えが示されているか。

(言文 715, 716・2022)

との「脚問」を掲げ、的確・至当に「法師」本位に読む文脈理解に基づいたと思いき問いへと、その表現の変更をおこなった。

また、中学校教科書も、実は、上に掲出した版の後に改訂を経た、すなわち2021年度使用開始の現行のそれでは、

- ・「徒然草」の筆者は、「仁和寺にある法師」のどのような行動に対して「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」と考えたのだろうか。（てびき：東京書籍・国語 801）
- ・「徒然草」第五十二段で、筆者はなぜ「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」といっているのか、考えよう。（学びの道しるべ 読みを深める：三省堂・国語 802）
- ・法師が誤解した原因はどこにあると考えられるか。
- ・「先達はあらまほしきことなり」という表現にこめられた、作者の主張はどのようなものか。（読み深めよう：教育出版・国語 803）
- ・法師は、どんな勘違いをしてしたのだろうか。原文から抜き出したり、159 ページの図を使ったりして説明しよう。
- ・作者は、法師の勘違いをどのように捉えているだろう。作者の考えがわかる部分を原文から抜き出そう。（学習 読みを深める・考えをもつ：光村図書・国語 804）

と、これが全貌なのだが、一部は表現の微細な差異にとどまるものの、教育出版の2つめの問い・指示が象徴的に示証するように、言い得べくんばまともな「てびき」なり「しるべ」なりへと、やはり変容を遂げた。「教訓」としての第3段落すなわち章段掉尾の一文の、章段内での位置づけと解釈とに係る正しき理解がようやく、いくばくかなりとも浸透し始めたのだと信じたいところだが、大庭（2023）などを関するにつけ、現場が変わるにはなお相應の時間を要するようにも思しい。そこには、それこそ年季の入った授業者が営々とおこなってきた、教材解釈と授業方法両々の実践の積み上げが、強固に横たわっているからである。

それに抗するには、上述した教科書の変容がしっかりと定着し、それが教師用指導書の記述内容の刷新をもたらしてくれる日の一日も早い到来を願いつつ、さしあたっては、真に拠るべき往昔・現今の解釈・理解をこきまぜて更新した、教材の新たな把握に基づいてする改善の授業の実践を、一つまた一つと増やし、じわりじわりと前へ横へと広めてゆくに及くはないであろう。

\*

\*

\*

さて、具体的には、先ずは川平（2020）のいわゆる説話的構造に係る主たる説述を平たく説くことから始め、いずれ最終授業回でそこに戻ってくる、そんな授業計画の大枠をイメージするところから始めようか。

次いで、益田(1959)が押さえなしてくれていた「けり」の説明と確認。すなわち、第52段は、兼好が伝え聞いたものである、ということ。日常の座談の場で聞き得た話を、簡潔で絶妙な短編にまとめあげた筆力の冴えを、生徒ともども味わいたいところだが、これは、言うまでもなく、説いてどうこうするものではない。これまた最終回の授業で、あるいはその手前の途次の授業で、学習者が感覚として実感できるかどうか、或る意味で授業者の手腕の見せどころであり、それが試されるところともなるだろう。

本編の叙述については、長年の宿願を果たすべく、ただひとり黙々と歩みつづけて石清水の地を訪うた「法師」の心姿、果たしてその地に至り着きながら、ひとり合点をしたまま帰途に就いた彼の姿、その両々を鮮やかに印象づけた段落として第1段落をくくりたい。

第2段落は、まず何よりも、「かたへの人」に語った「法師」の話を、ただただ直接話法で記すにとどめた、その文章のありようを確認し、見つめたい。次には、「こそ」に着目して、一つには八幡宮の尊厳さに対する心の敬虔なかたむきが、もう一つには「法師」自身の行動に係る禁欲さが、それぞれ明瞭にかたどられていることを確認したい。

その上で、その対座の場で実際には当然に「かたへの人」の反応があったであろうこと、それによって「法師」には体面を失う瞬間が訪れたであろうことに気づかせ、さらに、語られたであろう「かたへの人」の批評、それを承けての「法師」の表情を想像させたい。

さて、信念に基づく我意にとらわれ、頑ななまでに生真面目にふるまった人間が——念のため言い添えるが、あくまでも「人間が」であって、断じて「仁和寺にある法師」が、ではない——図らずも生み出してしまう、そんな悲しくも哀れな滑稽さがにわかに浮き彫りにされ、そこに、そのときに、作者の所見がさりげなく示される、その、際やかで、さわやかな印象を残さずにはおかない文体と構成の妙味を味わい、味わわせたい。

——と、そんなそんな展開を思い描いてみるのだが、いかがであろうか。

## おわりに

いまさら言うまでもないことながら、人文科学も「科学」である以上、否定・批判すべきは厳にしてそれを更新し、善しとすべきは現にしてそれを後に繋いでゆくべきこと、当然であるし、国語・国文学「研究」もその例外ではないはずである。であれば、これは自戒を込めてになるけれども、悪しきところあれば自説であれ、あるいは持説こそ、潔く撤回ないし更新し、よしと思うところあれば速やかにまとめ、当然に学校の現場も含めて弘く江湖に問うべきだろう。

教室を担う授業者は授業者で、「教育」に任じて「研究」の現在にも意を注ぎ、新にして正なるものを取り入れることに意識的でありたい。持ち前の、その授業案や授業方法が実践の実績を積み上げたものであればあるほど、そこに更新すべき、あるいは刷新すべきところはないか、謙虚・虚心に、点検の眼を向けたい。

教科書も教師用指導書も、現実的に、そう滑らかには変わり得ない。であれば、その変容の日を便々と待ってなどいられまい。授業者・研究者は互いに互いの「いま」を識ろうとすることに努め、日々、教材理解や授業に係る「現在」を更新してゆくほかはあるまい。

上には、さしあたり『徒然草』第52段について、かかわりのあるところを示したつもりである。

さて、「法師」は、「法師」をめぐる授業は、「更新」されるであろうか。願い、祈るばかりである。

## [注]

- (1) 2012年11月に開催された上代文学会秋季大会での報告「国語教科書の中の『万葉集』—高等学校「国語総合」を例として」は大きな反響を呼び、のちに活字化もされた〔梶川 (2014a)〕。
- (2) たとえば2014年4月の東京大学国語国文学会大会での「教育と研究」と題したシンポジウム、同年同月に発行された『文学・語学』第209号誌上での「日本文学・日本語学と「教育」」をテーマとして組まれた拡大特集（ちなみに、そこには梶川の別稿〔梶川 (2014b)〕も収載されている）、また2016年11月の梶川信行編『おかしいぞ！国語教科書 古すぎる万葉集の読み方』（笠間書院）の刊行、さらには『國語と國文學』2017年10月号誌上での「教育と研究」と題した特集、などである。
- (3) 注（2）に掲げた『國語と國文學』の編集後記による。
- (4) 以下、煩瑣・混乱を避けるべく教科書の総名称は掲げず、出版社名・教科書記号と番号・使用開始年度を示す。諒とされたい。
- (5) 引用は、便宜上、東京書籍版教科書『新しい国語 2』（国語 801・2021）に拠る。
- (6) たとえば光村図書『国語 2』（国語 804・2021）。
- (7) 三木（1982）。
- (8) 中野（2018）。
- (9) 管見のかぎりでは、久保田（1989）に指摘があるのみである。

## [参考文献]

- 稲田利徳（2008）「徒歩より詣づ——「徒然草」第五十二段の解釈とその周縁——」『徒然草論』第三章 第五節：pp.336-357 笠間書院
- 大庭珠枝（2023）「古典の授業で発問・助言・課題学習を活かす——教材『徒然草』『仁和寺にある法師』（兼好法師）〈中2〉を使って」「読み」の授業研究会編『国語授業の改革 22「深い学び」を生み出す 国語授業の発問・助言・学習課題』I-5：pp.44-51 学文社
- 小川剛生（2015）『新版 徒然草 現代語訳付き』：pp.59-60 角川ソフィア文庫
- 梶川信行（2014a）「国語教科書の中の『万葉集』——高等学校「国語総合」を例として」『語文』148：pp.1-15 日本大学
- 梶川信行（2014b）「高等学校『国語総合』の教科書を考える——『万葉集』に関する教材を例として——」『文学・語学』209：pp.2-13 全国大学国語国文学会
- 川平敏文（2020）「兼好の巧みな話芸」『徒然草』（中公新書 2585）第三章：pp.115-149 中央公論新社
- 久保田淳（1989）「極楽寺、高良などを見て（徒然草評釈 113）」『國文學』34-1：pp.150-155 學燈社
- 桑原博史（1977）「第五一段——専門家の尊重——」『徒然草の鑑賞と批評』第五章一：pp.209-214 明治書院
- 国文学研究資料館蔵『徒然草諺解 卷二』（南部草壽著、寛文9年刊、請求記号：89-98-1）：7ウ～8オ <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/200016336/manifest>
- 国立文書館蔵『徒然草寿命院抄』（秦宗巴著、慶長9年刊、請求番号：特 119-0002-0001）：70オ～ウ <https://www.digital.archives.go.jp/item/3938381>
- 齋藤清衛（1952）『徒然草の新しい解釈』：pp.87-89 至文堂
- 島内裕子（2010）『徒然草』：pp.111-113 ちくま学芸文庫

- 富倉徳次郎・貴志正造 (1975) 「本文鑑賞 (五 人間理解者としてのことば (イ) さまざまの人間像)」 『方丈記・徒然草』 (鑑賞日本古典文学 第 18 卷) : pp.248-254 角川書店
- 中野貴文 (2018) 「ICT を活用した古典の授業づくりについて—『徒然草』「仁和寺にある法師」—」 『教職・学芸員課程研究』 創刊号 : pp.36-44 東京女子大学教職課程・学芸員課程
- 原國人 (2023) 「『徒然草』 第五二段考 ——仁和寺の老僧はなぜ石清水に参詣したのか——」 『国語教材を掘く——『ごん狐』から『舞姫』まで』 第 11 章 : pp.191-217 武蔵野書院
- 古橋恒夫 (1974) 「徒然草の鑑賞 (第五一段～第六〇段)」 『徒然草講座 第二卷／徒然草とその鑑賞 I』 : pp.136-148 有精堂
- 益田勝実 (1959) 「徒然草 ——中学三年の教材研究——」 幸田国広編『益田勝実の仕事 5 国語教育論集成』 (2006) : pp.184-201 筑摩書房。初出は、倉沢栄吉他編『国語教材研究講座 5 文学的教材と説明的教材 (中学校)』 朝倉書店
- 三木紀人 (1982) 『徒然草 (二)』 : pp.46-50 講談社学術文庫
- 安良岡康作 (1967) 『徒然草全注釈 上巻』 : pp.239-244 角川書店

